

沖縄県副知事・弁護士

## 与世田 兼稔さん

### 弁護士から 副知事へ

沖縄県は平成24年5月15日、本土復帰40周年を迎えた。復帰評価に関する世論調査によれば復帰5年後に僅か40%でしかなかった肯定的評価が、現在は約80%を超えている。公共インフラ整備が充実、政治的社会的に安定、経済面、特に観光面で復帰時点で観光客は僅か44万人程度だったのが平成23年度約538万人、観光収入約3782億円余と激増したことも肯定的評価の原因だと思つ。他方、米軍基地問題、特に普天間基地移設問題(オスプレイ配備問題・米軍人の集団強姦致傷等

犯罪の頻発問題も含む)については解決の兆しすら見えない。この現状が放置されたままだと県民不満が爆発しかねない危機的状況にある。私は現在、県副知事として「何をすべきか? 何ができるか?」を自問しながら多忙な日々を送っている。なぜ、私が副知事なのか? この問いに答えるため少しだけ思い出を語つてみたい。

私は沖縄本島より南西410キロ、東京からだと約2000キロの遙か南方海上に位置する八重山諸島の中心島・石垣島で生まれ育った。なぜ明大に進学したかだが、高校2年次(昭和42年)、友人数名とユースホテルを転々としながら鹿児島から東京まで旅をした。当時の感覚では大都会東京は一生に一度行ければよい、というほど遠かった。私はこの旅で神田御茶ノ水界隈の空気を吸つてしまい、その途端、大学生活はこの地だと決めた。頑固な親父を説得するのに「司法試験合格を目指す!」との方便を使い昭和44年に明大法学部に入学できた。この年は全国で学園紛争が燃え盛っており、入学後すぐに全学休講、やがて全学ロックア

### Kanetoshi Yoseda

沖縄県副知事(平成23年4月就任~現在に至る)  
弁護士法人与世田総合法律事務所代表弁護士

昭和49年 明治大学法学部法律学科卒  
昭和52年 司法試験第2次試験合格  
昭和53年 立教大学大学院修士課程法学研究科修了(法学修士)  
昭和55年 弁護士登録(東京弁護士会)  
昭和58年 与世田兼稔法律事務所開設(沖縄弁護士会)  
平成16年4月~17年3月 沖縄弁護士会会長

【主な著書・論文】  
「新版交通事故の法律相談」(共著、有斐閣)  
「会社役員をめぐる法律相談」(共著、学陽書房)  
ほか著書・論文多数



ウトとなり大都会東京に一人放り出された。当時、沖縄出身者は沖縄復帰闘争と70年安保闘争に積極的に関与すべきが当然という空気が充満しており、執拗にオルグされ何度かヘルメットをかぶって学生集会やデモにも参加した。「いちご白書をもつ一度」を「さむ」と当時の思い出が沸々と蘇る。

今でも不思議に思うことだが、あの集会で沖縄問題の論争に巻き込まれ、この世界から逃げ出すべきとの直感が働いた。その方法が、なぜか「休学して海外へ」であった。バイトで稼いだ資金を渡航費用にと計画していたが親に無断休学がはれ送金停止。計画が頓挫しかねない危機に直面した。友人らに「青年は荒野をめざす！」だと豪語した以上、是が非でも実行しなければならぬ。親父に泣きを入れて、ようやく渡航資金

の目途がついたのが昭和45年10月頃であった。冬將軍を迎えようとしているモスクワへの旅立ちなど凍死に行くようなものだと思えた。それで赤道直下の島々ミクロネシアに目的地を変更。約半年間、サイパン、グアム、トラック諸島、マーシャル諸島を放浪した。テント生活のつもりであったが、行く先々の地元の人たちに歓迎され居候生活となった。この時、「どこでも生きていける！」という妙な自信が生まれた。

復学後、親父との約束を果たすべく駿台法科研究室に入り真剣に司法試験合格を目指し毎週1回の答案練習会のために法律書と格闘するようになった。卒業の年(昭和49年)、ようやく合格の可能性を感じとれるようになった。受験申込日を失念するという大チョンボをして号泣。このエネルギー消化のため立教大学

大学院修士課程に進学し田宮裕教授の下で刑法を学ぶ。自分の感覚では大学院生活と受験生活は両立できるつもりでいたが現実はずっと。受験対策の時間がとれず短答式試験の合格すらできないまま昭和52年、背水の覚悟で司法試験を受験、初めて短答式試験に合格。続いての論文式試験は最初で最後だと思っていたため嘘のようだが「受験させて頂いて感謝」という気持ちで完全燃焼した。幸運なことに最終合格で最高裁判法研修所を終え(32期)、昭和55年東京弁護士会に弁護士登録、同58年地元沖縄で独立開業した。

弁護士業というのは依頼者が自力で解決することが困難な法律紛争、いわば直面した危機をどう解決するか。まさに弁護士の知識・経験等の総合力が問われるビジネスだ。大袈

褌なようだが四六時中依頼者のための法律構成を考えて30年余を過ごしてきた。このような業務で形成された人的関係者を介して平成22年暮れ、2期目当選を果たした仲井真知事より副知事就任の打診がなされてきた。事務所経営云々という問題で躊躇する気持ちもあつたが「なんでも経験よ！」の女房の一言で受諾した。

副知事となって満2年が経過しようとしている。弁護士業から副知事に就任しての驚きは行政のダイナミズムにあつた。偶々、沖縄県が21世紀ビジョン計画(沖縄振興計画)策定中という重要な時期であつたこともあつて、沖縄県の近未来像(平成34年度まで)を想定し、その実現に向けての主要事業計画の策定という得難い経験をした。

実は計画策定中、「何でこんなこ

とまで？」と思う事業が山ほどあつた。弁護士の性で思い付くままに批判的な辛口の意見を述べたりした。だが担当者らから当該事業の政策目的を聞くと、改めて沖縄県全体が離島苦を抱えている特殊な地域であると感じざるを得なかつた。本土との距離的不利性を如何にして解決するか？ 県民全体に平等な競争機会(教育・経済活動等々)を確保するにはどうすればよいか？ 0歳児保育や24時間保育は本当に必要か？ むしろ、このような歪んだ社会構造を改める政策目標を掲げるべきではないか？ 等々。

行政現場は、理想論ではなく、目の前にある緊急な課題を解決することが求められている。弁護士では経験できない大きな視野と実に木目細かな配慮の必要性を否応なしに学



公務で「泡盛の女王」の表敬を受ける

ばさせられている。

また沖縄の基地問題を担当していると防衛外交とりわけ日米安保体制についての検討を迫られ否応なしに沖縄県の立ち位置が見えてくる。

副知事として苦勞する点は、弁護士と異なり自由な個人的意見の表明が許されず常に知事の基本政策（政治的スタンス・政治公約）と矛盾のないような表現に努めなければならぬことだ。突然のマスコミ取材時には特に神経を使ってしまう。ストレスは、このような日常から生まれている。だが、正直いって、弁護士であれば経験できようがない副知事に任命してくれた仲井眞知事には感謝！ 感謝！ 感謝である。もし、私が担当した事業等が沖縄県の将来にながしかの好影響を与えることができたとすれば望外の幸せと言っ外ない。

誰の人生にも転機がある。私の人生は道草ばかり食っていたようだが、

最後は親父との「司法試験合格」という途方もない約束が脳内に確りとインプットされ、「自分の言葉に嘘はつかない」を実現しようと努力してきたことで今がある。

その原点が明治大学での友人・先輩・受験仲間との出会いであった。明大に在籍できたことにも感謝！ 感謝！ 感謝である。

最後に、私は現在地元で毎月一回、学部・年齢を問わず学友が集う校友会（ゴルフ・模合もあひ）に時間が許す限り参加するように努めている。この結束こそが他大学にはない明大の良さだと思っ。